

×月×日

ヒマラヤ・アンナプルナ・トレッキング

早朝六時に起こされ、空港に八時到着。午前九時三十分発のブッダエアは遅れに遅れ、午後二時を過ぎても出発しない。時間つぶしにその間、カトマンドゥ空港のトイレ視察をした。便所はしゃがみスタイル、タイルの床に陶器の便器、石本の水遣の下に銀で出来ているらしい？水壺がある。自分の持ち物であったそれを流し、別れをつける。

スーベニアもキヨスク程度。見るものも買うものも無く、することも無し。ポーッとしてきた三時頃やっと飛行機がきたという。飛行場をつつきり片隅の飛行機に乗りこもうとしたら、「まったあ」とシルバーグレーの空港職員。「なんでだろう？」パイロットが昼食にいったきりとか。チョロリと出はじめた日差しのなか、野ざらし状態の飛行場でパイロット待ち一時間。やっと搭乗。丸めた脱脂綿とあめ玉を手渡される。「なんでだろう？」十九人乗りの軽飛行機、音が激しいので耳栓しろという事。耳栓して、イメ玉しゃぶって、座席に座って、更に三十分待つ。八千メートルのヒマラヤの山並みに興奮して、飛んだのはたったの二十五分だった。

×月×日

二千八百七十四メートル・ゴラパニキャンプサイト

ゴラパニに来るまで、我がアンナプルナにはまだ逢えていない。テントから首だけ出して、ヒマラヤの夜空を見上げる。天気は今ひとつすっきりしない。キャンプサイトのはずれに、四角いテントで目隠しをした、広さ半畳ほどの穴を掘っただけのトイレがある。誰かの知恵で、携帯用消臭剤が隅においてある。利用者は各自はるばる持参のトイレトーパーに紐を通し、首からさげて使用する。使用後の紙は横の缶に捨てる。後で焼却するらしい？そんな生活にも慣れてきたる

夕食の後でポーター達が歌い踊ってくれたレッサムピリリの歌、頭のなかでレッサムピリリ、レッサムピリリのリフレインだけが残って歌っている。あるだけの衣類を着込み、シュラフの隙間に物を詰めても寒い。眠ろうとするのだから頭はまだレッサムピリリしている。うとうとしかけた頃、何処かのテントから泊まらぬクシャミが聞こえてきて、又眠れなくなった。

午前3時半、テントの外で「モーニン」。熱い紅茶が差し入れられる。十五分程たって又「モーニン」。なみなみとお湯の入った、ピカピカにみがきあげられた洗面器が置かれる。(洗面器だけではなく食器類はすべてピカピカのステンレス)。テントから這い出し顔を洗うと今日のスタート。四時十五分、寒さ対策をし、ヘッドランプを点け出発。歩き出してすぐ急な登り。突如、頭痛と吐き気、めまいに襲われる。高山病？前列から遅れはじめる。

トイレに行きたい。あの大きなうしろに飛び込んで済ませちゃおうか。こらえて歩く。歩く。先導している私のポーター、カルマの背中には、私のサブザック。真っ暗な山道をヘッドランプがユラユラ上に向かう。「ユキさんOK」カルマが手を差し出した。一本通の真っ暗闇。どうしよう？まあいいか！ひっぱりあげる力強いカルマの手（このあと東京中、とれほどカルマに

たすけられたことか) 目的地プーンヒル (三千百九十八メートル) の頂上はまだ真っ暗。一息入れて落ち着いた。太陽が出るか出ないか。待望のアンナプルナの逢えるか逢えぬか。寒い! カルマとディビにゴアを着せられる。なんとやさしきシェルパ絶ち。あとで聞いたらこんなことしてもらったのは私だけだった。いかに私が病人であったか。

時間とともに薄墨色に少しずつ目がなれてくる。うっすらぼんやりとおおいかぶさる影が、山であると気がつくのにしばし空白。思考が止まっている。山じゃないか? ええ山? しーんとして、物音なし。息を凝らして、灰色の中をさぐる。山! 山! うおーと思わず声。

東側に

マチャプチャレ (六千九百九十三メートル)

アンナプルナ南峰 (七千二百十九メートル)

アンナプルナ I 峰 (八千九十一メートル)

バラハシカール (七千六百四十七メートル)

ニルギル (七千六十一メートル)

西側に

ダウラギリ I 峰 (八千六百六十七メートル)

ダウラギリ II 峰 (七千七百五十一メートル)

嗚呼! 来て良かった。登って良かった。カルマが、にっこり白い歯をみせる。山々が競いあい肩をせり上げ、のびあがるようにして、プーンヒルを見下ろし、我々を包んでくれた。アンナプルナに逢えた。何時の間にか高山病らしきものはうすらいでいる。ひとわたり勇姿をみせびらかしてくれた彼等峰々は、数十分であざやかに姿を隠した。

このあと、今日はプーンヒルを下りてからも九時間行程の予定。どんな感激が待っていてくれるのだろう。カルマに先導され、心残しつつプーンヒルを後にした。